

スミス  
國富論



中山伊知郎著

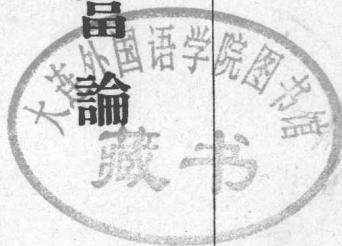
327515



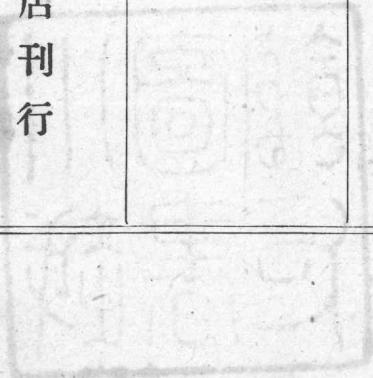
日文 701739052

中山伊知郎著

スミス 國 富論



岩波書店刊行



昭和十一年一月三日 第一刷發行  
昭和二十五年一月三十日 第七刷發行

スミス 國富論  
定價百圓



著者 中山伊知郎なかやま いちろう

發行者 東京千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者 東京都練馬區練馬南町一ノ三五三番地  
平尾秀吉

發行所

東京千代田區株式會社  
神田一ツ橋二ノ三  
岩波書店

落丁本・亂丁本は取替いたしません

新日本印刷・永井製本

自分は國富論によつて示されたスミス經濟學の理論的性格を均衡理論にあるものと考へる。勿論國富論は單なる理論の書ではない。それは理論・歴史・政策の多面的な綜合として始めて時代の書たる面目をもつものである。けれどもスミスに於て經濟學の父を見出すほどの人はこの豊富な内容を貫く均衡理論の構造を見逃してはならない。國富論に於ける經濟學的思惟のアウトノミーは均衡理論によつて保證せられるのであつて、歴史も政策もそれが經濟の歴史であり又經濟の政策である限りこの基礎の上で理解されねばならぬものである。この小著は何よりもかゝる立場から國富論の理論的性格を明にせんとするものである。名著を傳へてその面目を躍如たらしめると云ふことは到底自分の力の及ぶところではない。唯それが以上の意味に於て多少の特色をもち得るならば自分の望は足りるのである。

この著の成立に際しては特に東京商科大學のプロ・ゼミナールに於て國富論の讀書會に參

加した學生諸君の活潑なる討論を回想せざるを得ない。自分はこれらの討論からうけた刺戟を感謝すると共に諸君の學問に對する熱情のかはらざることを希望するものである。

昭和十年十一月十五日

中山伊知郎



目次

序說雜記	一
第一章 分業と均衡	三四
第二章 價值論	四三
第三章 自然價格論	七一
第四章 賃銀・利潤及び地代	八九
第五章 資本と經濟の循環	一一〇
第六章 資本と經濟の發展	一三五
第七章 自然的自由の制度	一五六
第八章 理論と政策	一八二

序 說 雜 記

一 ある時代の思想はその時代の産物であると同時に又その時代を超えた運命をもつ。少くともそれが生れた時代を超えて何らかの形に於て新なる時代の問題に耐へ得るもののみが真に古典の名に値するものと云ふべきであらう。アダム・スミスの國富論が經濟學に於ける古典中の古典とせられる意味も亦素よりこゝになければならぬ。さうしてこの意味に於てスミスを読むこと、これが吾々の目的である。

かゝる立場から國富論を見ることは決してその時代的背景を輕視するものではない。この場合に於ても時代を理解することが缺くべからざる前提をなすこと勿論である。特に國

富論の如く名實共にその時代を代表するものと云はれる場合に於て、然もその時代が吾々の時代に遠くない場合に於ては一層さうであらう。すなはちスミスの生涯を尋ね、その時代の社會を語り、又その思想の由來を明にすることはスミスの現代的意義を讀み取るための不可缺の前提である。たゞこれらの必要は吾々の當面の目的に對しては主として準備的の段階に屬する。従つてそれらについては序説に於て簡單にふれるに止めるであらう。

二 アダム・スミスの生涯(註一)には特記すべき事件が少い。大體に於て吾々は、天賦の才能と非凡の人格とを有する一學者の比較的平和なる生涯を想像すればよいであらう。スミスは一七二三年六月五日スコットランドのカーコウディ (Kirkcaldy) と云ふ町に生れ、グラスゴウ及びオックスフォード大學に學んだ。學者乃至教授としてのスミスの活動は一七四八年から三ケ年に互つてエディンバラ大學で行はれた英文學及び經濟學の講義を以て始まる。一七五一年から一七六四年までの十四年間はグラスゴウ大學の教授として始めには論理學を、後には主として道德哲學 (moral philosophy) を講じた。この道德哲學の講義内



容は自然神學、倫理學、正義論及び經濟學に互る廣汎なものであつて、スミスの學說の基本内容は、大體この講義によつて成立したものと考へてよい。(註二) 國富論はこの講義の第四の部分が後に至つて大成せられたものであり、又同じくスミスの主著の一たる「道德情操論」(The theory of moral sentiments, 1759.) はこの講義の第二部に相當するのである。

一七六四年には「道德情操論」によつてスミスを知つた政治家チャールズ・タウンゼントの切望によつて、バックルウ公爵(Duke of Buccleugh)の師傅として約三年の外遊に上る。トウルウズに十八ヶ月、フランス南部の旅行に二ヶ月、ジュネエヴに二ヶ月、さうしてパリに十ヶ月のこの旅行は恐らく平坦なるスミスの生涯の最も大きな變化であつたに相違ない。國富論はこのフランス旅行の間に先づトウルウズに於て起稿されたものである。一七六六年パリから歸國して以來の十年間は殆んど國富論の著述のために費されたと云つてよい。著述の意向は既に一七五九年出版の道德情操論の中に明に示されて居たのであるがその大成は主としてこの十年間の苦心に負ふものである。かくして國富論、或ひは正確には

「諸國民の富の性質及び原因に關する一研究」(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations.) が遂に公にせられたのは一七七六年三月九日であつた。(註三)

一七七八年から一七九〇年其の死に至るまでの十二年間はエヂンバラの關稅監督官として無事平靜な晩年であつた。否國富論が齎したスミスの名聲はこの晩年を更に榮譽ある幸福を以て飾つたと云つてよい。一七八七年から一七八九年に至る三ヶ年間のグラスゴウ大學總長の榮職はこの平和にして多幸なりし晩年にふさはしい名譽であつたと見られるであらう。

三 スミスの生涯は殆んどそのまゝ國富論成立の歴史である。それは少くとも前後二十年の苦心の成果たる點に於て學界稀に見る大著と云ふべきである。けれどもそれは素より國富論の總てが著者の獨創に出づることを意味するものではない。スミスに於ては、むしろ綜合の天才を見るべしと云ふのが一般の見解であり、又事實について示されるところである。然らばスミスに於て綜合せられたるものは何々であるか。これを明にすることは

單に國富論のみならず一般にスミス及びその時代を理解するための最も重要な途であるに相違ない。かくて通常この場合に第一に問題とせられるのは國富論の直接の想源である。(註四) 國富論の想源に直接關係をもつものとして、普通に擧げられる人々には、先づ次の三人がある。第一にはその師ハッチソン (Francis Hutcheson)、第二にはその友ヒューム (David Hume)、第三には「蜜蜂物語」の著者としてのマンデヴィル (Mandeville) がこれである。否吾々は更にスミスがフランス旅行を通じて知ることを得たフィジオクラットの人々、就中ケネー (François Quesnay)、デュポン (Dupont de Nemours)、チュルゴ (Turgot) 等の存在を忘れてはならない。これらの人々との交遊が國富論の内容を豊富にして居ることも亦争ひ難い事實だからである。然しながらこれら總ての人々がそれぞれ如何なる程度までスミスの思想の大成に参加して居るかは容易に測り難い。たとへこの測定がある程度まで可能なる場合に於ても、吾々は常にスミスの如き思想は例へば優れた詩人のその如く、單に外側からのみ造られたものではないと云ふことを忘れてはならないのである。

この意味に於て國富論の想源を特に二三の先人の思想に結びつけることは意義が少い。吾々はむしろこれを國富論の内容が如何なる思想的構造を有するかと云ふ問題に一般化して取扱ふべきであらう。それは想源を求めると云ふよりはむしろ國富論を構成する思想群の性質を顧みることになるのであるが、この思想群の性質を顧みることこそ經濟學に於けるこの著の地位を理解する所以に外ならぬ。(註五) かゝる立場から國富論の内容を見ると、吾は先づそれが明に區別し得べき二つの思想群から成立つことを見出す。その一は廣義の哲學即ち大なる母胎科學としての哲學の流に屬するものであり、その二は時事問題の必要に應ずるための實際家の意見に屬するものである。

一般に經濟學の一つの重要な想源が廣義の哲學に存することについては疑はない。その最初の文獻的表現は遠くアリストテレス及びプラトンの昔に溯り得るであらう。彼等の説くところが如何なる程度に經濟學的内容をもつかはこゝに問題ではない。これらの哲學者にとつては社會生活乃至社會活動そのものが最初から問題として眺められたと云ふ

ことが重要なのである。ギリシヤ哲學のこの思想はルネッサンスと共に新なる力を以て人  
人を支配した。社會に關する科學が實證的科學として成立すべき氣運はこゝに開かれたの  
である。この氣運の下に先づ「合理化」の過程を歩んだものは神學であつた。倫理學も亦  
神學的哲學の母胎をはなれて獨立した。しかし經濟學の立場から見ても重要なものは自  
然法學の成立であらう。法律學はこの自然法の思想の下に次第に實證科學に發展した。そ  
れと同時に國家の學乃至社會の學も亦同じ途を進むこととなる。さうして社會の學の中  
には當然に今日の經濟學が含まれねばならないのである。自然法思想の下に實證的な社會科  
學の發達に貢獻した學者の數は極めて多い。經濟學の關する限りに於てもフィジオクラッ  
トの人々を始めとして、プウフェンドルフ(Pufendorf)、グロチウス(Grotius)、ハッチソン  
(Hutcheson)、ホッブス(Hobbes)、ロック(Locke)等をあげねばならないであらう。ハッチ  
ソンを師とするアダム・スミスが同じくこの一群の中にあることは云ふまでもない。一般  
にこれらの合理化された神學、倫理學、法學及び經濟學は總稱して道德哲學と呼ばれた。



それは當時の自然科学たりし自然哲學に對して新興の精神科學の總體を指すものである。さうして今スミスのグラスゴウ大學に於ける講義の主題がこの道德哲學であることを想起するならば、國富論の内容をなす第一の思想群が如何なる性質を有するものであるかは自ら明となるであらう。(註六)

轉じて第二の思想群を見る。第二の思想群は既に述べたやうに主として實際上の利害關係から生ずるものであつて従つて屢々斷片的な性質をもつにすぎないものであるが、しかも經濟學の一般的想源としての重要は決して第一のものに劣らない。光の科學としてよりもむしろ果の科學としての經濟學の面目は屢々この第二の想源を機縁として發揮せられることは經濟學の發達史が身を以て示すところである。特に國富論の内容としての第二の思想群はやがては經濟學を何よりもイギリスの學問として發達せしめた理由を示すものとして充分の注意に値するものである。一般に經濟學の想源としての第二の思想群が何故に特にイギリスに於て發達したかの理由には凡そ二つの事情をあげることが出来る。その一は

イギリス當時の經濟狀態であり、その二はこの國の特殊なる政治機構である。國富論の出版に至るまでのイギリスの經濟狀態は、一言にして云へば、産業革命直前の世界であつた。そこには外部的には尙マーカンティリズムの經濟制度が支配して居た。けれども内部的には既に將に來るべき經濟躍進への進行が著々として行はれて居たのである。新なる内容と舊き制度との衝突は到るところに於て起らざるを得ない。經濟の内容に於て、他の諸國に先行したところのイギリスが最も痛切に時事問題への關心をもつたことは、むしろ當然と云ふべきであらう。その上に第二の理由が加はる。即ち當時のイギリスの政治機構の下に於ては政策の遂行は常に廣汎なる輿論の支持を必要とした。輿論に訴へることの必要は自ら時事問題の活潑なる論議を生む。貨幣の問題、爲替の問題、貿易政策、銀行の問題の如き當時の重要な經濟問題については何れも豊富なる論争文獻が残されて居ること吾々のよく知るところである。マン(Thomas Mun)、チャイルド(Sir Josiah Child)を始めとしロック(Locke)、バーボン(Nicholas Barbon)、ノリス(Sir D. North)を有する十七

世紀のイギリスはこの點に於て全く他の諸國の追従を許さないものがある。この傾向は勿論十八世紀に入つてからも變らなかつた。否十七世紀の後半から十八世紀の前半に入る頃にはこれらの時事問題の論議は最初の斷片的な一時性を脱却して根本的な經濟分析への要求を示し、そこには自ら豊富なる經濟概念乃至敘述的な思考過程の蓄積が見られるに至つて居る。十八世紀に於けるこの傾向の代表者としてはスミスの親友ヒュームをあげるこゝとが最も適當であらう。同時に吾々は國富論の第二の思想群が如何なるものであるかを想像し得るのである。(註七)

近代經濟學の二大想源は十八世紀のイギリスに於てそれぞれ全く熟して居た。經濟學の成立のためには唯その綜合が必要とせられたにすぎない。さうして綜合への土臺は既に時代の進行によつて礎かれて居た。まつところは唯この綜合の任に耐へる人のみである。この人がアダム・スミスに外ならぬことは改めて云ふまでもない。國富論は二つの想源を獨創的に綜合して、新なる科學を要求する時代の聲に應ずるものであつた。國富論によつて

スミスが經濟學の父と呼ばれる消息も亦自らこゝに存する。

四 國富論の内容をなすところの二つの思想群が以上の如き性質を有するものとすれば、その内容が今日一般に經濟學と呼ばれて居るものよりも遙に廣汎なることは敢て怪しむことを要しない。このことは國富論が自己完了的な獨立の學問ではなく始めから道德哲學と呼ばれる大なる學問體系の一部分であることによつて既に充分に想像せられるところであらう。即ち大なる學問體系の一部分としての國富論は同じくこの大なる體系に屬するとこの倫理學、法制學と同一の平面に於て交渉すべき約束をもつものと云ふべく、かゝる約束の存在はそれだけ國富論の内容を廣汎ならしめるものと云ふべきである。けれども國富論の内容の廣汎なる主たる理由はむしろ國富論に於て示された綜合の性質に求められる。即ち國富論に於て示された綜合は既に述べたやうに時代の要求に應じ、時代の聲を語るものであつた。しかしそれは同時にまさに時代の聲を語るものであつてそれ以上でも又それ以下でもなかつた。こゝにスミスの成功の根本原因があると同時にこゝに國富論の内容に